

2017年度GTセミナー 第46回保育環境セミナー後編 2017.10.16～10.18

第35号 2017年10月30日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社ガガヤ 奥山卓矢

セミナー2日目 実践発表

京都 社会福祉法人鞍馬山正香苑 鞍馬山保育園

保育理念：みんなのいのち輝く保育園

設立：昭和25年 定員：45名 見守る保育実践歴：11年

子どもの活動、食育活動、職員の視点からの事例発表

子どもの活動：鞍馬の四季折々の体いっぱい感じている子どもたち。

裏の土手に栗の木があり、全園児で栗拾いに行った。職員が木を揺らし栗が落ちるのを待つ子どもたち。その様子を見て、5歳児が自分もしてみたいと思って、石垣をよじ登り木を揺らし、小さい子たちが憧れと応援をしながら観ている。乳児も幼児さんが靴で栗を採ろうとしているのを見て真似て拾った栗を湯がいて食べる。

食育活動：食べ物の地図に取り組み、各地の産地情報を提示。

(食事のイラストを描き張り付けている。)調理担当者は大きな魚を捌いたことがなかったため、川床で有名な貴船で料理旅館を営んでいる保護者に相談したところ、営業を休んで板前さんからぶりの捌き方を教わり、子どもたちの前でぶりを捌くライブキッチンを実施。

職員：月に1回グループごとに実施する一円対話。4年ほど経ち一円

対話以外の時間にもまず話を聞いて職員間の中に根付いてきました。

各クラスの情報を集約する連絡ノートの実施。



食育活動：食べ物地図



セミナープログラム



セミナーQ&A

●過去のバックナンバー

第32号

築120年古民家『聴福庵』⑦

第33号

臥竜塾年間講座④

第34号

第46回保育環境セミナー前編

<http://www.caguya.co.jp/topics/news/p9889/>

セミナーを終えて思うこと

Q & Aは、保育環境セミナーにとって切っても切れないプログラムです。この中で毎回藤森先生は、2時間の枠を目一杯使って、1つでも多くの質問に対しての考え方を示していただきます。

参加した先生方から寄せられる質問について事務局の私たちは、取りまとめを行うのですが、質問内容を一切加工することなく、寄せられたまま集計を行っています。

そして、藤森先生は事前に質問内容を見ることはなく、参加者の皆様と同じタイミングで質問内容を目にして、質問に応えられています。

質問を目にして数秒後に話しはじめる藤森先生の頭の中は一体、どうなっているのだろうかといつも思っています。

今年度も保育環境セミナーを3度開催し、質問内容を取りまとめていると同じような質問を頂いていることに気が付きます。

ですが、そこに出てくる事例は毎回異なり、特に最近では藤森先生の小学校勤務時代の話が多くあるように感じるのです。

昔のお話を伺うと過去の経験があって今の保育の形になっていること、そして、その全てが今に活かしていることを感じ、質問に答えているのと同時に、藤森先生の人生そのものを語っているのだと気が付きました。

「政治に王道があるように、保育にも『道』があると思っています。保育は『保育学』という学問ではなく、人としての生き方、道を考えることだと思っています。」『見守る保育』藤森平司著（学研）
セミナーを終え、ふと、著書の一節が思い浮かびました。

（報告者：株式会社カグヤ 奥山卓矢）



〒161-0023

東京都新宿区西新宿 3-2-11 新宿三井ビルディング 2号館 10階

Tel:03-5909-7155

毎週月曜日に配信しています。

ミマモルジュメールマガジン発行：株式会社カグヤ 奥山卓矢



メールマガジンのご登録は、QRコードからお願いします。

第46回保育環境セミナー『Q&A』

今回、セミナーにご参加頂いた皆様から寄せられた質問について、【気になる子どもへの対応】【行事】【食育（食事）】【保育士の対応】【その他】の5項目に分類し、藤森代表に考え方を示して頂きました。

【気になる子どもへの対応】

各園、各クラスにはほとんど配慮児がいると思いますが、その子ども、保護者との対応・ケアはどのポイントが重要だと思いますか？

障害児と言われている子だが、最近の研究や考え方を話したい。まず私たち人類は生き物の中でも脳が大きい。これは、どちらが先かではないが私たちは社会を形成していく生き物。社会の集団が大きくなるほど脳が大きくなると言われ、私たちは社会を形成している。どっちが先かというもあるが私たちは直立で立つことで重い脳を支えられるが、実は直立で立つと体を支えるために骨格が変わる。特に骨盤がお椀型にならないと直立で立てない。お椀型になると赤ちゃんが産まれる産道が狭くなる。狭くなるために問題が起きる。まず一つが狭い楕円の穴から出るので赤ちゃんの頭は楕円になっているが前後に細長くなっている。産道から出すと肩が反対についているので、赤ちゃんの頭が出ると90度回転して出ないといけない。人類だけが人の手が必要で一人では産めないことから、人は1人で生きていないことを表している。一人で生きていけないからと言って産小屋で産んでいた民族がいたが、そこでは多くの女性が亡くなってしまった。お産婆さんをつけて出産をしているように、私たちは生まれたときから人の手が必要になる。脳が大きい人類が狭い穴から出るために人類は胎内で脳の1/4を育て産出し、3/4を生まれてから育てる。脳の拡大は出産後に起きる。ほかの生き物は100%胎内で脳を育てる。乳児保育は脳の拡大に大きく影響する。例えば、障害者が脳における障害でも現在の考え方では生まれた後の環境が重要と言われている。昔のように発達障害は生まれつきで病気ではないので、悪化もしないけど回復もしないと言われていたが後天的に回復することもありうるという考え方に少なくなってきている。ですから、生まれる前は0.6%くらいしかいないと言われている。最近質問が多いことに発達障害の子のような子が増えてきている。これは最近の説では乳幼児保育の環境、保育の質が関係していると言われている。3,4,5歳で困った行動を起こす子たちは乳児保育の環境を見直した方がいい。私が危惧しているところで乳児保育で落ち着かせようと思ったら、一人の先生が一人の子にべったりしたほうが赤ちゃんは落ち着きます。しかし3,4,5歳になると人との関係が築けず、障害のような症状を起こすことが多いと言われている。ですから、チーム保育ではないが0歳の先生は0歳だけで固まるのは危険です。0歳の先生こそ、年長になった時どうなるかを知らないといけない。私たちがしないといけないのは、0歳の保育がどう年長になるかを検証しないとけない。大学の先生と考え方が食い違うところだが、担当性的ように子どもに対して決まった先生が相手をして関わると3,4,5歳が障害っぽくなり、人との関係が築けない子が多い気がする。はっきり検証されていないので、はっきり言えないが一部屋で保育をされてきた子たちが私の園に転園してくると、ほとんど障害っぽい。ほかの子との関係が築けない。そして3歳で入れば卒園までに追いつくが、4歳だと障害児に認定されてしまうことが多い。私たちは乳児における保育を見直すことで3,4,5歳に影響していることが私は実体験からしている。もう一つが発達障害という考え方。発達障害のひとつには昔、脳のニューロン、シナプスが白紙で生まれ次第に経験することで、脳のシナプス、ニューロンが増えてくると言われていたが、生まれて1歳までの間が一番多い。これはいらぬものを上手に減らしていく。これを刈り込みという。刈りこむことが成長であり、発達であると言われている。いらぬものを減らし、必要なものをより精度を高くすることが成長と言われている。これをバランスよく刈り込んでいくことが必要で、ある部分が刈り込めない一部が残ってしまうのは発達障害と言われ、偏りの激しい子という。その時に何で、偏りの激しい子が存在するかという人類にとって必要な存在だから。偏りが激しい子が今言われているのが理系の科学者は発達障害と言われている。高いところがあるから発明ができると言われている。エジソン、ビルゲイツ、スピルバーグにしてもそう。今、ヨーロッパでは発達障害の高いところを伸ばそうということが多い。日本では低いところを引き上げようとする人が多い。実はそうではなく、高いところを伸ばしてあげようという考え方が多い。ブロックをしてお集りに来ないときに

この子をお集りに来させるよりも、ブロックの天才にした方がいいだろうと考えている。特に理系に関する事、そうではなくても文字に関してのLDもある。トムクルーズは読み書きできない。セリフは音声で覚えている。しかし、その演技力が優れていると言われている。無理やり読み書きを教えるよりも、演技力をつけた方が有名になる。偏りが激しい子を見たときにどこを優れているかを見ると、その子のこだわりが強い。それを保障してあげること。無理やり嫌なことをさせるよりも、落ち着く場所を見つけ得意を伸ばすことをすると落ち着くと言われている。無理にさせるとパニックになる。私の園に一人ダウン症の子がいるが目立たないと思う。それは好きなことを好きなところでやっているから。次の問題は一般の社会の中で暮らしていかないといけないので、人に危害をする与えるときは止めないといけない。今、言われているのは、1つの五感を使った行動で制止するとあまり聞かないと言われている。2つ以上の五感を使うこと。ダメな時にだめだと聴覚を使うが、仕草をしながら言うとか、図形を見せ口で言いながら写真を見せたり、何種類かを使って指示した方がいいと言われている。目に見えるように書いて、「今日はこれができたね」とか、言葉と同時に視覚的に訴えないといけないと言われている。指示をするときは2つ以上の内容を指示すると理解できないと言われている。あそこへ行って〇〇をしなさいではなく、あそこへ行くとシンプルな指示をする。それはやってはいけないときに使う。日常の中で危害は止めないといけないので、そういう指示をするときは五感を使った方法からするということがある。もう一つの問題、基本的に障害であると私たちの判断と感ずることが多いことに空間認知能力という物がある。小学校へ行くとはっきりわかる。マスに漢字を書くときに、人偏とかを真ん中に書いてしまう。作りがはみ出るように。全体の空間認知できない子がいる。こういう子は、前に子どもが二人立っていて、そこをすり抜けようとする、普通だったら隙間と肩幅を考え無理だと思ふと肩を縦にするが、空間認知が無理なので通り抜けられると思ふので、そのまま行くとぶつかる。「何でぶつかるんだ！」と怒り喧嘩になる。その時に狭いのにわざとぶつかったように見えるが、それを叱っても無理。そこは理解してあげないといけない。私たちの判断で、一方的に叱ることはその子にとって理不尽に叱られているとしか思わない。障害の世界を理解する。最近分かって来たのが味覚。障害のあるお子さんは例えば、イチゴを食べるとつぶつぶがあるが、あれが生け花をするときの剣山のように舌の中で突き刺さるように感じ嫌がる。トマトのぬるぬるが普通の人以上に嫌がる。これをわがままと判断することが多いが、味覚が敏感で私たちと違う感覚を持っている。明るさについて音についても敏感に感じてしまうことがある。私たちはこの子たちの世界を理解してあげないといけない。私たちとすると、私たちと違うからと思ふかもしれないが、そこを理解してあげないといけない。わがままと言われていたことが、実は障害だと言われてきている。ただ、障害を「害」と書くが実は見ている世界が違う。向こうからすると私たちの方が障害で、別の世界があることを理解した方がいい。もう一つ障害と言っても、どの部分が障害かがあるので、障害だから何かではなく、どの部分が気になるかで支援が必要かで見ないといけない。最近言われているインクルーシブ、インクルージョンの考え方。障害だから一緒にしましょうではなく、みんなで社会を作っているからそれぞれ支援をしないといけない部分をしてあげましょうという考え方。その子を見て、障害だよと区別するのではなく、どの部分に手助けが必要かを見てあげてあげる。その他は一緒にやればいい。それを単純にこれまで分けていたので差別意識を持っていた。ですから親は認めたがらないのは、差別されてきた歴史があり差別されると思ふから。ある部分が優れているという認識を持つと、どの部分に必要なかを話し合えるはず。障害の子は悪い子だという意識が強いが、実はそうではない認識を私たちがして、どの部分を活かしてどの部分に手助けかを判断してあげるといい。0歳からの育ちを見直すこと、私がよく例に出すが障害に対する考え方の変えた理由の一つに、ハワイ大学の名誉教授の吉川先生がいる。吉川先生のお子さんが、ハワイの幼稚園を卒園児就学時検診を受けたら、3人障害の子が見つかった。そして、その一人吉川先生の息子さんが自閉症児と言われたそう。奥さんもハワイ大学の教授でショックでいるいと探して、スポーツをさせたがなかなか続かない。親教というところへ行き学んだり、一つずつその日にやったことを振り返り、目に見える形で褒めた。振り返ることと数が一緒になりそれを続けた。ある時、息子のサッカーで大事な試合があるからと観に行ったら負けていた。それを息子が逆転のシュートを打ってゴールした。「お父さん観てた、観てた！」と言った。その日も振り返りをして「お前は、今日14個もいいことした」と言ったら、「14個褒められるよりも14回キスが欲しい」と言ったらいい。お父さんも気づいて14回キスをした。この2つの出来事を通して、今は弁護士として活躍している。障害でも受け入れることで2つの行動が本人を認めたことで弁護士になった。自閉症の傾向があるが、やはり障害だからと言って判断するのではなく、思いやりの心、認める気持ちを持つとその子のいいところが社会に還元できる子になってくれるだろうと思ふ。障害も

様々あるし困っていると思うが、その子たちの気持ちを分かってあげる、その子の見えている世界を見て、理解して寄り添ってあげることが大事だと思っている。ほかの子たちもつられることなく、仲間意識を持てるように先生が接する。先生の接し方が他のことにも伝わる。最近研究で解明されてきた考え方がなってきた。偏りという見方をする。天才というという取り組み方です。解決するか分からないが見直してみてください。

発達に偏りがあるように思われる子どもがいて、その保護者にも似たような偏りがあるように感じる。その人は園での様子を伝えてもまともにきいてくれない。子どものことを一緒に考えていくことが難しい保護者への対応はどのようにすればいいのでしょうか。

保護者に対しては直接関係あるか分からないが、ひどい保護者がいて一番ひどいのは虐待で通報するしかない。不安定愛着も問題になっているのが、清水アキラさんが取材で、「自分は何で強く叱ったからこうなった」と反省している。きつくやったら、ああいう風にはならない。やたらと甘やかしたり、きつくしたり、自分の感情で愛したりしないことが一番危険。べたべた可愛がったりすることで問題が多い。それに対して、どうしたらいいかという研究がある。そういう親を持った子に対して研究によると、優しく受け止めてあげる保育士の影響の方が大きいという研究がある。ひどい親だから仕方ないのではなく、その分その子を受け止めることが必要だと思う。親を変えることは難しいが、子どもを介して親を変える。それから、私の妻もよく「こんな風に保育園でやっても学校へ行ったらそうしない。」だからと言って、保育もひどくしていいのか。中にはひどい場所もいっぱいある。こういうことをしたからと言って、いい子になるとは限らない。しかし、だからと言ってひどくやるわけにはいかない。昨日、悪の子たちを面倒見ていた時の話をしたが、その中でよくなっていく子たちもいた。よくなる子と良くならない子の違いは、人生で出会った大人が悪かった場合は戻らない。どこかの時代で自分を理解してくれた人がいれば、どこかで悪くなくても戻る。私の思いは私の園を出た子が犯罪者になるかもしれないが、ふと保育園の頃、理解してくれた先生がいたと思うだけで違うと思う。せめて、そういう存在になってほしい。色々な影響を与えていく。もちろん親が悪かった、出会った大人が悪かったこともあるかもしれないが、どこかの時代で理解してくれることが多い。幼児期にその子を理解してあげる。一番忘れて感謝されない時期だが、ふと思い出したとき、可愛がってくれたなという存在になることが大事だと思っている。せめて園にいる間がその子を理解してあげたいと思っている。

【行事】

**見守る保育として行事をすること（運動会、発表会、参観）などを行う場合、最終的に一斉保育・設定保育として行わないと難しい気がしますが、具体的に本番にむけてどのように進めていけばいいのでしょうか？
例えば、まったく興味を示さず、やりたがらない子に対しては、それを見守る形でよいのでしょうか。**

まず、運動会発表会など一斉で行いますし、保育参観は別ですが一斉にやることはある。しかし、気をつけないといけないのは何をさせるか。今回の指針でははっきりしていないので不本意だが、指針の改訂の一つの根拠に小学校への円滑な移行についての会議の結果が影響している。小学校への円滑な接続という言い方をしている。幼少連携と言われていたが、今度の指針では、円滑な接続と言われている。はっきりと教育の違いを理解するべきだと言われている。児童期の教育は学習指導要領に則っている。まず教科ごとに決められている。学年ごとに到達目標が決められている。ですから、学年ごとの授業、教科ごとの時間が必要で学習指導要領で決められている。指針には卒園するまでに望ましい姿にすることが決められている。年齢ごとに発達過程があったが目安であって目標ではなく、誤解されるので今回削られている。年齢までの到達目標は書かれていない。教科はなく領域があり、領域は子どもに経験させるための切り口が決められている。その中の将来の学びの基礎と言われているが、小学校で伸びるように何をしているかということ、児童期の到達目標は〇〇ができるようにすると書かれている。楽器は演奏できるようにする。音程は正しく歌うなどできることが目的です。それに対して、指針の領域では〇〇を楽しむ。〇〇を感じる、豊かにするということが書かれている。歌えるようにすることではなく、歌うことを楽しむ、音を味わうことが目的に書かれている。この姿を見せるのが学習発表会です。運動会では、

跳び箱を飛べるようになったことを見せることが目標ですのでそれが運動会。楽器が弾けるようになった姿を見せるのが発表会で、幼児期の教育は楽しむ、味わうことなので楽しんでいる姿を見せることが発表会です。運動会は体を動かしていることを見せることが運動会です。自分の声を味わったりとかが私たちの行事のはず。何かを仕込んでできるようにする、見せることではない。何故かという小学校へ行ってできるようにするために、まず楽しんだり、味わったりすることが必要なんです。そうしないで小学校でやるようにならないんです。小学校でできるようにするためには、この時期に十分楽しんだり、味わったり、豊かにすることが円滑に移行することなんです。その姿を見せることが主です。最近、地域で合唱祭があった。ほかの園と合同でしたが自分の園の子どもたちのひいきではないが素晴らしかった。ほかの園は、言われた通り歌わないといけないプレッシャーで戻したりしたりしていた。私の園児だけは楽しそうに歌っていた。他の園は「後ろまで届く声で歌いましょう！」と言っているのを聞いて、うちの子どもたちは笑っていた。自分の声を味わうことが大事。子どもがつかなくて頑張るのではなく、子どもは体を動かすことが好きなので見直した方がいい。やりたがらない子は何でやりたがらないか。楽しかったらそんなことはない。これまでは親に見せることが強かった。見せるのはいいのだが何を見せるか。ある保育団体の役員と話したときにびっくりしたことがある。その役員は私からすると制度のことばかり言っていて胡散臭いと思っていたら、見直したことがあった。その人はもともと高校の体育の先生だった。都合が悪くなり保育園に入ったが何をすればいいか分からなかったの、高校でやっていた組体操を園児で行い、それを先生たちや保護者はそれを見て感動して涙した。「こんなにできるんだ〜」と驚いたが、我に戻ったときに、子どもだけが感動していなかった。やらせた先生と親は感動していたが、子どもたちは感動していなかったの組体操をやめたと言った。私たちは大人のために保育をしているわけではない。ドイツで最近オープン保育が広がっている。オープン保育は、園のどこで何をしてもいい、園内全体がオープンという考え方。どこへ行ってもいいとすると、子どものこと把握できません。親が迎えに来た時にどこにいるか探しに行くのでは？と聞いたら、「私たちも心配しました、戸惑いました。反対運動もありました。毎日議論を重ねた結果、結論が出なかったの、こう考えることにした。確かにどこにいるか把握できないが、子どもはどうか、楽しいだろうか、だったら大変な問題は大人側にあることに気付きました。大変だけどやりましょうと全員が合意した。反対理由は、大人側であることに気付きました。子どもはどうなのか、というところで合意した。」と言っていた。私たちもそういう視点を持たないといけないと思う。子どもがどうであるかという視点が薄い。大人が、どうするかが強い気がする。そこにいかないというところが私からすれば、日本の教育が遅れている。子どもを主体として考えることを通して、大人が管理しやすいような教育をしていると思う。

ある市の教育部長さんに相談されたことがある。「クラスの人数を減らすよりも、先生の数を複数にした方がいいと思いはじめた。先生方は一クラスの人数を減らした方がいいと言われ、その理由は外国は少ないからと言われ、藤森先生はどう思いますか？」と聞かれた。外国が少ないのは、自律的な行動をするために少ない。日本の先生が少ない方がいいのは、管理がしやすいから要求する。私からすると今の教育方法で人数を減らすのは危険だと思っている。外国は一人ひとりの活動を保障している。昨年、ドイツの小学校を見に行った時に算数の課題をしていた。そのプリントの課題でびっくりした。それは廊下の吹き抜けでする子たちがいたり、靴箱の上で寝そべってやったり、教室の中には二人位しかいなかった。解くことが目的なので、どこでどんな姿勢でやることは特に何もなかった。小学校では、みんなクロックスを履いていた。日本では絶対しない。靴の後ろを踏んでいたら怒られる。ドイツでは廊下を走らせたくなければ、クロックスを履かせればいいと言っていた。それでいて、走るなどというのはおかしいと言っていた。何が大事かは国によって違うけれど、もう少しどっちがいいかではなく、何を私たちは子どもにしたいのか、行事を通して何を親に伝えたいのかを見直すこと。そこには個人差がある。一斉はもちろんだ大事だけれど、その中に個人差があることをどう保障できるか。ですから、うちでも跳び箱を見せるが普通の運動遊びを見せる。4、5、6段にするかその子によって変える。練習の時に、どれくらい飛べるかを把握していると先生たちは変えられます。その子なりの姿を見せることをうちではしている。そういうことに気を付けた一斉だと思う。行事全てを見直すことが必要。練習して発達以上のことを見せることが大事ではない。小学校へ行って円滑な移行にならない。小学校出来るようになるためには、この時期は楽しむことが大事であることを行事でももう一度見直してみるといい。

普段は異年齢保育をしています。運動会や発表会などはどのようにしていますか。どこまでを保育士が決められているのか、毎年どんな演目があるのかなど知りたいです。見守る保育を行っていく中で、行事や保育参観などをどのようにカリキュラム（の中）に組み込んでいくのか。運動会、発表会の具体的内容、練習時間、発表例など知りたいです。

細かいことは行事の本に書いているのでそちらを読んでみてください。そもそも運動会の歴史はどう始まったかを書いているので読んでみてください。例えば、運動会は運動能力を見せるので普段の運動遊びをします。特にうちの園は、水曜日は体を動かす日としている。何故なら小学校の校庭を借りているので動かす日を決めている。しかし、運動会当日は、異年齢だと発達が見えにくいので年齢別で行っています。何をさせるかという、運動会の予行練習の時に各クラスどういった運動遊びをしてきたかをみんなに見せる。そこで何の種目にするかを決める。歳によって好き嫌い、盛り上がり方が違うので、サッカーのシュートを見せよう、雲梯を見せようとか、普段の姿を見せようと練習はほとんどしない。練習をするのは普段の保育をさぼっている人がする。普段からしていることをしている。発表会は、お楽しみ会で劇をやるが小さい子の劇は、毎朝の手遊びをして返事をするもの。うちの場合は言語と表現を見せる。名前を呼ばれたら返事をする。舞台の上で返事をするのを見せるとか手遊びをして、見立て遊びをするのでフェルトで作った食べ物を食べる真似をするとか舞台の上です。3歳位になると毎朝、人数報告に来る。これをグループごとでいうようにします。3歳以上になると劇っぽくなる。子どもたちが好きな絵本をテープサートで作って、自分たちで振り付けをするようになる。そのもととなった絵本を飾り、これが好きでこれをしますとしている。普段の遊びからしている。普段置いてあるので台本と人形を年少さんがやったりします。当日は年長さんがやることはある。ほかの年齢も経験しているが発表会はそうしている。もう一つ、年齢別でやるが練習は異年齢の中でやる。年長は年長で劇の練習をします。自分たちで結構練習をしていて、先生は練習をするのを止めているくらい。当日が一番盛り上がるようにしたいので、あまり練習をさせないようにしている。その時に3,4歳が年長の劇を見たり、遊んだりという子たちがいると、次の年に4歳は5歳になるとすぐに練習を始める。これが異年齢の意味。見て学ぶこと。演じるのは年長だけでやるが、だからと言って部屋に閉じこもってしまうと大変なことがある。担任が一人なのでやり切れない、数人の先生が手伝わないといけなくなる。なので、3,4歳の先生が手伝います。そうするとゾーンで遊んでいるか観客席で見ている。先生が複数、子どもたちの前でやるので、次の年に伝承されていく。異年齢のいい効果だと思っている。世界文化社から行事の本が出ています。

【食育（食事）】

0歳児の保護者数名からの質問です。「食べたいだけ食事を与えてもよいのか？家では大人と同じくらいの量を食べる。園ではおかわりはあまり要求しないが、家では泣いてほしがる」「食べすぎて胃が大きくなる？肥満になる？泣いてもあげない方がよい？」などに対して職員として、満腹中枢の未熟さもある。ある程度でストップは必要かも。量に対しての子の体格、運動量の話し、量を決めていくこと、意欲があることはよいetcなどの話はしますが、やはり心配…。安心させてあげられる藤森先生流の魔法の言葉を教えてください。

まず省我保育園の時だったが、献立表で都知事賞を貰ったことがある。それは献立表の右側にその日の給食で足りないものを書いてある。例えば、緑黄色野菜が足りたということが書いてある。それを夕飯で採ってくださいということが書いてある。足りないという書き方ではなく、家庭での食事のポイントが書いてある。何かというと、その子にとっての栄養は1日を通してトータルで採るもので保育もそう。園だけでは成長を支えることではない、食事も家での食事と考えて欲しいということ。給食だけ食べてれば揃うわけではない。今日の昼食はこれ採るけど、これは足りないので夕食の参考にしてください。ということを書いてある。ということで食事は家と一緒に、家で食べれば園で食べないこともある。トータルの足りる、足りないかはきちんと体重が増えているか。見た感じ園で少ないだけで一喜一憂せず、その子の体重が増えていけば、園で足りない分は家で補っているのでしょうかということがあると思う。トータルでとらえることが大事なので家と違うのは当然です。家でのいっぱい食べれば調整しているのでしょうかね。孫の経験からトータルで採っているのは、大人よりも長い期間で採っている可能性がある。私たちは1日で夕飯で足りなければ補うように採るが、

やたら食べる日と食べない日がある。もっと長期で、トータルでバランスをとっているのかなと思う。もう少し全体的に見る。睡眠でもそういわれている。一番小さいクラスの年齢では、家で睡眠時間と園での睡眠時間を書き込むようにして、どの時間帯に寝ているか、食べているかを書き込むようにしている。親と一緒にトータルで考えるといい。食べすぎで自分で量が分からないことがある。最近分かっていることは、乳児の頃の母乳の与え方が影響しているといわれている。母乳を飲むとしたら、量は大人からは分からない。わかるのは本人しか分からない。本人がいっぱいになったらやめるはず。足りなければもっと飲むはず。子どもは母乳を飲むことで自分が必要な量を把握している。これを調べると個人差が大きく、ちょっとしか飲まなくても成長している子もいるそう。本人が止めればやめるし、それを食事に行くと自分で決めるといわれている。それを母乳を早く止めて哺乳瓶で上げてしまうと、目安が本に書いてあると親はその通りさせようとする。そうすると食べすぎたり、肥満になったりするといわれている。そこまでいらなくてもOcc あげないと必要な量ではなく、与えられた量を飲むことになり、大人が決めていかなければいけない。幼児期をそうしてしまったり、大人になった時、自分で決められないのが、過食症や拒食症と言われている人たち。自分で決められないから、大人が止めないとね、としていると止めればとまるが、大人になってから誰が止めるのか。一生ついて止めてあげるならいいが、どこかで自分で決めないといけない。それを自分で判断できる能力を本来持っているはずだが、止める止めないではなく、自分で食べる量を判断できる工夫をすることがある。満腹感小さい子は胃が小さい。大人のように食べてしまうと。胃が大きくなってしまふ。胃の大きさをうちの園では、食育の担当がペットボトルの半分くらいしか子どもはないのに、大人はいっぱい入る。一遍には食べられない。ただ胃に入ったものは2時間くらいで下に行って空になる。小さい子は、小さいだけ空になるので頻りに食べたがる。なので2歳までは10時におやつがある。幼児も15時におやつを食べる。これはお菓子を食ふことではなく、胃が小さいので何回かに分けるという意味です。そうしないと、やたらに夕食にお腹が空いてしまう。そういう意味で家で食ふこともあると思う。地方なら今もそうかもしれないが15、6時に園から帰っていた。今はうちの園では遅いと20時に家に帰るとしたら、給食を昔のように11時くらいに食べてしまったら、午後お腹空いてたまらない。今、給食を見直して遅く食ふようにしている。保育園は早いイメージがある、それは胃が小さいからというが、だから給食があるはず。10時のおやつは水分補給や歯の咀嚼力をつけるため、お腹をいっぱいするところはない。本来は間に食ふということ。最近、大人も太っている人は間食をしましょと言われてる。間食をするのは何回かに分けましょということを言われている。間食にジャンクを食べてしまうのでだめ。口当たりがいいので栄養価ばかりが高いのだが、そういうことを含め食事は1日のトータルの生活のリズムの中で、どう食べていくが見直すことが必要。本来は食ふ量が分かっている、体重を毎月測ることでチェックする。体重がある指数の中に入っているといいが、太るのは肥満の子が多くなってきて、気をつけないといけませんが、量というよりもカロリーが高すぎるということがある。栄養価計算で数値を決めてもいいといわれている。最近カロリーが大きいので数値は園で決めてもいいということになり、正常値の中で体重が増加していくような工夫をしていくことだと思ふ。肥満にならないことに気をつけた方がいい。調理とよく相談してみてください。

【保育士の対応】

衛生面（手洗いの仕方など）マナー（上履きを揃える、食事の仕方）などで大人の声掛けが多くなってしまふ。生活援助の声掛けについて教えてもらいたいです。

いわゆる日本でいう躰ということがどうなのかということが言われる。躰は漢字から言うと、身を美しくするという意味。2つ目は仕付け糸というように、その形を維持させるためにしつける。その形が身についたら、仕付け糸を抜いても崩れないということなのでその通りにさせることではない。もう一つ、日本独特の考え方がある。人への思いやりが、しつけられることがある。人への思いやり配慮。上履きを揃えることは、トイレで脱ぐとしたら、次の人が使いやすいように脱ぐので、その意味もなくその通りさせることではない。食事の仕方も私の園では開園した時、民営化した時、親からの苦情がすごかった。2歳のある親から呼ばれ、「味噌汁を職員が左側に出しているから右側に出すようにしなさい

い！」と言われ、職員へ伝えた。そうしたら、「間違っただけをどうしてみんなの前で注意しないの！」と言われた。その時に何も言わなかったがこう思った。何で右側なのか、右利きの人が食べやすいから右側に出します。親に反論するのなら、この子は左利きだから、左の方が食べやすいからと言いやすかったが、そういう意味で食事の置く場所は、出す側が食べる人を思いやって出すのが躰です。その後食べやすいように置き換えてもいいのです。出しての思いやりの話が、食事のマナーです。日本のルールは相手の思いやりなので、何かをしつけるよりも人への思いやりを育てることが大事だと思っています。ですから、うるさい静かにしなさいではなく、聞きたい人が聞こえないことで基本は聞きたい人が注意します。先生が代わりに言う必要はない。躰とするよりも、お互いが社会の中で生きていくルールだと思っている。それを邪魔しないなら、あまり細かく言う必要はないと思っている。例えば、一つのマニュアルが作れたらと思っているのが、朝の挨拶の項目があるとする。コンビニのマニュアルにはどんなセリフで、どのくらいの声の大きさを、どのような表情が書かれていると思う。お辞儀の角度は何度ということが書かれていると思う。私が作りたいのは、子どもが登園した時に登園したことに喜びをするような対応をすることと書く。ですから、にこっとするだけでもいいし、頷くだけでもいいし、大きな声でもいいと思う。その子が登園した時によかった、面白いことがありそうと思えるといい。初めて、出会った人への気持ちなので、親が子どもにあいさつしなさいと言った時に私は、お母さんの後ろに隠れるのは私への挨拶ですよ、いることを意識していることですからと伝えている。それが次第に理性が上回ると、ちゃんとあいさつになる。その前には他人の存在を知ること、反応すること、思いやりの気持ちを教えていかないといけない、それなしにセリフだけ覚えても、心のこもっていないセリフを言われても何の意味もない。私たちはその前の気持ちを育てることを教えたいことだと思います。ルールだからではなく、他の子が困るでしょうか、便利でしょうかという。振り返るよりも、子どもは色々なことに興味を持つ。その年齢によって大事なことを優先させる、1歳はきよろきよろして、やりたいわけなので、それを振り返って片づけなさいという必要はないと思っている。その代り興味の一つに先生を手伝うということがある。先生が片付けている時に手伝ってくれたら、ありがとうと言う。大変そうにしていると助けてくれる。ルールだからと次の遊びに行ってしまうのに、昔のように片づけてから行きなさい、とするのは小さいうちは必要ないと思っています。その年齢で何を大事にして考えることだと思います。思いやりからルールを知ること、この時期に、その子に何を大事にしてあげたいかを考えたときに、そうでないことは先生がやってあげることだと思っている。

0～1歳を24カ月という発達の連続性を大切にするという視点で、ワンフロアで保育することについては共感します。まだまだその考え方が職員に浸透していない段階にあり悩んでいます。どこでチーム保育を踏まえ担任という意識ではなく、チームも0～1歳児クラスを担当する意識を持つための働きかけと担任を保護者に紹介する際の伝え方を教えて頂きたいです。

1つは私の園はチーム保育と言っても担任はいます。そのひとつは、保護者にとっての所属観としてどの先生でもいいといっても保護者は困る。情報はあるところに集約した方がいいと思っている。保護者と対応するのは、その先生が主です。保護者に伝えるべきことはその先生に集まる。保育はその先生がするとは限らない。一人の先生がパーフェクトにできないから、色々な視点でいいところを伸ばし、見るところがいろいろ見えないので担任にはこだわらない。運動遊びをするときは得意な先生がする可能性がある。日誌はその先生が書くこともある。けがは見ていた先生が書きます。ただし担任へ伝えます。所属観のために担任を決め、保護者との対応は担任が中心になります。一人担任は3,4,5歳だけの話

で、下の年齢は複数で持っているのいいことにしている。保育をするとき普段は、一人の先生が見ることができないので一人に対してケアしないといけないということがある。けがをした時は、個人的に対応しないといけないが一人担任だと子どもの数が少なくても無理になってしまうので、全体で全体を見ること、発達を見るのも複数の先生で子どもの発達を見ることがある。ミマモリングのチェックをするのも一人の先生がつけることはない。5歳の子でも3,4,5歳の先生が話し合いながらチェックをする。3歳と4歳の先生も5歳のことを知らないといけない。障害の年長の担任がこの子、障害かもしれないと思っても、3歳や4歳の先生がこういうこともあったよと見ることも必要。普段は複数の目で見ることが必要。3,4,5歳の場合も1歳児は探索活動をします。部屋の外に出してしまうことは危険なので、部屋の中にパーテーションから出ることを認めてはいないが、出る子を見守っている。そのためには先生が点在していないといけない。担任だけだと出たら引き戻してしまう。出たら出たでその先の先生が見ている。明日園見学をする人は、01歳の部屋を見ると先生が点在しています。これをうちはサッカー型のチームワークと言っている。素人を見ているとボールに集まってしまう。プロになると、どこにボールが行くか分からないので、同じように先生が点在している。それを阿吽の呼吸だけでは難しいので、おおむね何番がどこにいるか決まっている。これもサッカー型なので、この辺の先生が問題が起きて職員室へ行ったらこっち側へ行ったり、穴を埋めるようにしている。空いたところには、そっと他の先生がフォローする。安心して子どもを抱っこして職員室へ行ける、というような全体が全体で動いている。これを本人たちはあまり意識していないそう。昨日の発表でうちの園紹介であったが、3番はこういう子たちを見るとあっても、タイプによって2番よりの先生もいる。その時に3番の先生は、今日はこっちだよと注意しているのかと思ったら、その先生は2番寄りにやるのが特徴なので、注意をしないで3番の部分は4番が補っていると言っていた。それはその人の特徴だと思っている。お互いがお互いの良さを活かしあっていくことがチームワークの良さ。出来ないところを注意し合うのではなく、良さを活かし合う。そのためにどこを補ったらいいかを考える。お互いが01歳のフロアーに点在している。担任は担任としていますし、保護者にはそうですし、ローテーションを組む時は必ず0歳の先生が園内にいるようにするとか配慮している。見学者の人に伝えたが0歳が途中入園してきました。一人先生が辞め10月から先生が足りなくなりました。誰か採用しないとイケないかなと思っていたら、先生たちが「2歳はもう、3歳になりはじめているので、6対1配置のままでいくと、来年子どもたちが困ります。2歳の先生が減らすべきなので0歳に行けばいい」と言ってきました。それで私は「2歳の先生の誰か0歳に行って」と言ったら抵抗された。何故か、2歳の先生が仲が良くて固まっている。なので、ここまで来て0歳に行けと言われても困ると言ってきたので、今年は失敗したなと思った。本人たちに「あなたたちは園全体よりも、2歳が大事だったんだね。じゃあ行かなくていい」と言ったら、泣いて謝って来た。強く言ったつもりはないが、2歳の先生から言ってきたのでそうかなと思ったが、今年は仲が良すぎて失敗した。昔こういうことがあった。ベテランの先生がずっと2歳の担任で、1月から0歳の経験をしてもらいたいから、来月から0歳に行くと男性の先生に言ったら、いいですよと言った。ここまで2歳をやって来たのにと言うかと思ったら、うちの園の職員であることは変わりませんからと言われた。親には大丈夫と聞いたら、「ちゃんと自分のことを信用しているから、大丈夫です」と言われた。その時に力があるなと思った。このときに、「いや、こんなにやって来たから2歳をやりたい」と言われたら、一見いいように思えるが自分がどういう役割をするかが大事であって、それは日本の教師にも言えること。よく私のクラスの子もたちと言う言い方をしますが、あなたの子どもではない。クラスの子もたちは所有物ではありませんし、これがドイツのオープン保育が極地。聞いたところ、オープン保育を進めるに当たり何をするか。すべての先生が全ての部屋場所の保育を体験すると言っていた。その後子どもはどこへ行ってもいいとする、と言ってい

た。私はその感覚が必要だと思っている。0歳の先生も年長が今何をしているか。私が出張でいないときは毎日メールで1日あったことを調理から報告させています。どういうことかということ、聞いて取材して回っている。0歳から今日どうだったと調理が聞いて私に報告している。報告を受けるといより、ほかのクラスを把握してほしいから。調理であっても0歳や年長がどんな保育をしたか知ってほしいから交代でしている。最初のうちは単純に取材して、こんなことがあった、来客があった以上だったが、どんなことを言ったか書いてと言って、最近は長くなった。調理からするとなかなか気づかないが、すべての先生が全てのことを知ってほしい。その中で自分がやるべきことを考えて欲しいと思っている。なにも01歳だけでなく、年長の先生がクラスが落ち着いていたら、赤ちゃんが泣いて手が足りなそうだったら、年長の先生がちょっと0歳へ行ってヘルプに入ることもある。こういう職員集団であってほしいと思っている。落ち着くと他のクラスの大変さが見えてくる。ちょっとヘルプに行く感覚、調理の男性が0歳の部屋を歩いていたら「暇？」と聞かれ「暇ではないけど」と言ったらしいが、授乳しててといわれたらしい。調理は検便をしているから使われている。下手に部屋の前を歩かないといっていた。そういう感覚でいいと思っている。自分のクラスだけでなく、全体を見て何処が大変かを分け合うことが大事だといわれている。それが子どもに移るといわれている。うちの園を研究に来た大学の先生がうちの保育を見て、先生のチームワークが子ども同士の関係に移っているといわれた。年長だからとしないで、子ども同士お互いが助け合うのは先生をモデルにしているといわれた。私たちだけがチームワークがいいというよりも、社会に出たときに社会の在り方を見せること。社会に出たときに貢献していくことが必要だということだと思います。これを子どもたちへ伝えるためにも、みんなで助け合うことが子どもに見せることが保育の1つだと思っている。お互いを信じあうこと、その先生の存在として信じることだと思います。それは子どもに対しても言えると思う。学生がうちに来た時に就職するときに園を選ぶポイントは、「あなたのいいところを活かしてくれるところに就職しなさい。その園はきっと、子どもたちのいいところを伸ばそうとする園だから」と言います。自分を変えないといけない、我慢しないといけないところはやめなさいと言います。直接の答えになるか分からないが、お互いが助け合うことがあれば、助けられた人はベテランになるとそういう対応をとると思う。

【その他】

子どもたちは、小学校へ進学したら一斉の授業になるとと思いますが、その移行はスムーズなのでしょうか。疑問に感じました。見守る保育を受けた子どもたちが卒園してからどのように成長したのか。(社会人になったら…etc) 乳児期に培った基礎がその後の人生を生き抜く力として活かしているというように実感した経験はありますか。見守る保育で育った子ども、保育士の方々のその後の話などありましたら是非お願いします。人は成長し続けると思っています。困難な場面で自分の人生を切り開いていった事例などをいくつか伺えましたらありがたいです。

実は私も知りたいと思っている。学校ではよく噂を聞く。まず一つ、この間教育新聞の「不易と流行」のコラムにいじめが多くなっている。いじめを根絶するためには方法があると書かれていた。社会学者が提案しているのが、集団学習を辞めて、全て家庭学習にする。社会があるからいじめがある。全部こうすればいいといっているとあったが不可能。全員が個別に家で勉強できるわけない。社会学者としては集団があるから仕方ないといっている。進化人類学者は異年齢で学習すればいいと提案している。実際に異学年交流が多い学校ほど、いじめが少ないというデータが出ている。今、小学校を

含め異学年交流が増えてきている。当然私たちも園で異年齢をしているので小学校へ行っても、当然他の学年を知り合っているのだから、異学年交流の時は発揮する。これからの学習方法は自ら考え取り組む時に発揮する。所謂教わることは目立たないが、生徒会活動をすると卒園児がほとんど占めましたなど保護者から聞くが、本当はデータをとってみたいと思っていて懸念事項になっている。自分の子がいろいろな場面で保育園時代にどんなことを身に付けたことが今役に立っているかアンケートをとりたいと思っているが、それは置いておいて、実は私たちの園を出たから全てが素晴らしい子になるとは限らない。色々な影響があるのでどうなるか分からないが今の大人たち、若者はいままでの教育を受けた結果であることが大事。親たちの問題は今までの結果だと見たとき、これまでに身についたものがある。しかし、欠けてしまっただけという結果になっていることもある。私たちはそういう大人にしないためにこういう方法があることを考えないといけない。この間あるセミナーに参加した。SEL教育（ソーシャル・エモーショナル・ラーニング）そこに参加した。世界の大学教授がそういう話をした。なぜ、エモーショナルコントロール（自分の気持ちをコントロールする力）がないかということだが、アメリカ、中国、シンガポールの話をしたが若者たちにある特徴がみられる。1つは親から中々独立しない、市民活動に興味がない、セックスレス、親を通して人と話をするというように、大人になりきれない若者が増えてきている。親の指示通りに動いてきてしまっているのだから、世の中に出ても自分の意思で行動できない大人が急増している。そのためにどんな力を小さいうちからつけるかを考える。私たちはこういう保育が必要だと思っているのは、こういう保育をすると将来立派になって成功するからではなく、今の大人にこういう力が欠けているからどういう力をつけるかだと思っている。セミナーの中で大人たちの心配しているのが経済学者。何故かというと、こういう若者は今の経済を支える力になっていない。何も経済優先ではないが、経済を支えられないとその国は滅びてしまう。経済学者が教育が問題だ、幼児教育が問題だと危惧してOECDが提案している。ECECスターティングストロング。サブタイトルがついているが幼児期を強く送り出そう。スタートの時期に強く押し出そうという施策をメインに取り組み始めた。社会を担う若者たちにこういう力をつけて欲しいと提案している。理想論でこういう子たちがいいね、ではなくて現実に支えていく人たちを支えるために乳幼児期が重要ということです。そういうことでどういうことをするべきか言われている。結果はずいぶん先に出ます。出た結果でこういう力があるけれど、こういう力が欠けているところを見て、どうするべきかを考えることで、私たちが提案する保育はそういうこと。見通しを立てるためにはAI人工知能が発達し、今ある職業のほとんどがなくなる中で新しい職業に就く中で何をさせればいいのか。どんな仕事に就くか分からない子どもたちに、どんな仕事についても発揮できる力をつけること。見通しを立てて提案することが大事だと思って、こういう保育をみんなで取り組もうとしている。現実にどんな力になっているか実際に調査してみたいと思っているが、どんな姿になるかはその子にとっていろいろな環境があり、幼児教育だけが影響しているか分からないが、今課題となっている若者たちを作るためには幼児教育、特に乳児から大事だと世界的に研究されている。そういう保育を私たちが日本に発信していこうと勉強会をしているので、自信をもってより考えを深めてより子どもにとっていい保育を作り上げて発信していってほしいと思っている。日本を支えるだけでなく世界を支えていかないといけないと思っている。あまり自分の国だけでお互いが挑発し合うような世界は安心して生活ができない。幸せになるためにはお互いが協力し助け合う国々で安心して生活していくために、こういう保育を私はぜひ広げていきたいと思っていますので、一緒になって深めていけたらと思っています。どうもありがとうございました。

本稿は、2017年10月17日に行われた第46回保育環境セミナーの「Q&A」の内容をまとめたものです。

（文責/奥山卓矢）